

し、得られた時間-放射能曲線を多項式で近似し、微分し、時間0の点に正規化した肝摂取速度比曲線を作成した。心では時間0の点に正規化した血液プール残存率曲線を作成した。正常例群では両曲線ともよく一致した結果が得られ、急性肝炎の症例群では病態の程度により変化した。両曲線の10分値はよい相関が得られた。劇症肝炎の症例では死亡例と生存例の間に血液プール残存率曲線に有意な差が見られた。肝摂取速度比曲線は肝機能(予備能)を評価することができ、肝摂取速度比曲線は診断基準の1つとして有用と考えられた。

21. transdiaphragmatic shunt を呈した肝硬変の一例

箕浦衣里子 山崎 哲郎 金田 朋洋
袴塚 崇 高橋 昭喜 山田 章吾
(東北大・放)
丸岡 伸 (同・医短)

肝硬変を基礎疾患として肝性胸水をきたした症例に対し、 $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイドを腹腔内に注入しシンチグラフィを施行したところ、腹腔に注入したRIの胸腔への移行が認められ、腹腔-胸腔シャントの存在が確認された。その結果をもとに胸腔鏡下にてシャント閉鎖術が施行され、術後、胸水の量は減少し、また再度施行されたシンチグラフィにてもRIの移行は認められず、シャントの閉鎖を確認した。このことより、核医学検査がシャントの存在を明らかにする上でも、手術の効果を確認する上でも有用であると思われた。

22. 肺癌治療の生理学的評価(小細胞癌)

堀越 理紀 手島 建夫 柳町 智宏
(仙台厚生病院・内)

肺癌における非観血的治療の効果判定は、解剖学的に腫瘍の縮小率を基準とするのが通例であるが、これに肺スキャンを含めた生理学的評価を加えて検討を試みた。治療効果の期待できる小細胞癌の症例を対象とし、治療前後で肺血流スキャン、テクネガスを用いた肺換気スキャン、肺機能検査、動脈血ガス分析を施行した。さらにスキャン画像に対しては肺血流改善比(IR)を定義して治療効果を数量的に評

価した。全体としては治療により生理学的改善が得られたが、腫瘍縮小率と生理学的指標の変化は必ずしも有意な相関を示さなかった。またCR群や肺門型肺癌では、解剖学的な改善に一致して生理機能がより改善する傾向が見られた。局所肺機能の評価としての肺スキャンを含めた総合的な生理学的治療効果判定が有用である。

23. 先天性心奇形に合併した末梢性肺動脈狭窄に対する血管形成術前後の肺血流シンチ

奥本 忠之 山崎 哲郎 金田 朋洋
袴塚 崇 箕浦衣里子 山田 章吾
(東北大・放)
丸岡 伸 (同・医短)

8例の先天性心奇形に合併した末梢性肺動脈狭窄に対して施行されたバルーン血管形成術の前後に肺血流シンチを行い、術前後の肺血流の変化を評価した。シンチについては、左右肺それぞれにつきプランナー前面像、後面像のカウンートを加算したものを各肺のカウンートとし、狭窄側肺のカウンート/左右肺カウンートの合計、を算出した。一方、アンギオ所見より左右肺動脈の最小径を計測し、狭窄側の径/左右径の和を算出した。この両者の値を比較して評価した。血管形成術成功例ではシンチ上の算出比も改善を示し、不成功例1例では算出比は改善を認めず、治療効果を反映していると考えられた。また、肺血流シンチおよびアンギオ所見より得られた算出比は、全体として有意の相関を認めた。本法は非侵襲的検査法であり、血管形成術前後の血流評価や長期的観察法として有用と考えられた。

24. ^{131}I -adosterol が集積した褐色細胞腫の一例

袴塚 崇 山崎 哲郎 金田 朋洋
箕浦衣里子 高橋 昭喜 山田 章吾
(東北大・放)
丸岡 伸 (同・医短)
木村 伯子 (同・病理形態)

高血圧、頭痛、多汗で受診した患者にはCT、MRIで左副腎に5センチほどの腫瘍が認められた。血中、尿中カテコラミンは高値を示したが、コルチゾー